

学校吹奏楽の活動における生徒の音楽能力の発達過程について

—— ベントリーテストによる中学校および高等学校吹奏楽部員の比較 ——

Evaluation on the Development of Musical Ability of School Band Members

新山王 政和

Masakazu SHINZANO

愛知教育大学教育学部音楽教室

1995年12月

はじめに

学校吹奏楽の普及率は1990年代初頭に中学校52%、高等学校61%に達しており、この割合は埼玉県の場合に17クラス以上を有する規模の学校数にほぼ一致するようである。⁽¹⁾ このような数字の上だけで、あるいはコンクールや各種行事等の華やかな“表”の部分だけを見れば、すでに学校吹奏楽が音楽教育の重要な一部分を占めており、今すぐにも社会教育の面からも大きな役割を担えるかのような錯覚に陥ってしまう。しかし名実ともにこれらの期待に応えるためには、子どもたちがその活動の素材である音楽に関して何を獲得することができたのか、どのように有意義な音楽的体験をしたのか、活動そのものが有する教育的効果や自己学習効果について、正当な手続きによって評価された客観的な資料に基づいてその真価を謙虚に問い直さなければならない。徳育や生活指導の面における活動の有効性も重要ではあるが、本来それらはメインである音楽に結びついた活動の一環として指導されるべきであり、精神論的な面を強く前面に押し出した取り組みだけでは対応しきれない状況にある。そして、そのあたりの誤解から学校吹奏楽の弊害について議論が交わされるに至っている。⁽²⁾⁽³⁾ 我々吹奏楽に携わる人間の思惑とは裏腹に、度を越した根性論で展開される学校吹奏楽に対する反感、特に「吹奏楽オタッキー」という言葉に象徴されるように同じ音楽の分野からの反発が強いことを再認識すべきであろう。無気力で部活動に参加する生徒が減少しつつある今日、自ら進んで熱心に取り組む生徒の存在はむしろ喜ぶべき現象であるが、ここで批判の対象にされているのは音楽的な内容の伴っていない活動や指導理念の欠如等、教師側に起因する問題点である。これについては、学校吹奏楽の存在意義にまで立ちかえて論議するまでもなく、教師の活動に対する意識の改革と指導や運営の際の適切な配慮によってその多くが解決され得るものと考えられる。これらのことから、将来学校吹奏楽が広く社会的認知を獲得していくためにも、吹奏楽当事者が自ら自己点検・自己評価の作業を積極的に行い、その結果をオープンにすることによって活動の真価を積極的に社会に問いかけていく努力が必要であろう。⁽⁴⁾ したがって筆者も、特に音楽に係わる部分にのみ焦点を絞って学校吹奏楽が有する教育的効果や自己学習効果について、第三者にも理解され得るよう標準化された音楽テストを用いて客観的に評

る価する作業を継続してきた。⁽⁵⁾⁽⁶⁾そして今回の研究では、A. Bentley によって作成されたテストを使用して得た高等学校吹奏楽部に所属する生徒のデータと、前回の調査で得ている中学校1年生のデータとを比較することによって、平均活動期間を約3年間に拡大した場合の音楽能力の発達過程について分析を試みたので、その結果の報告と併せてそれに基づいた幾つかの提言を行いたい。

1. 実験調査の概要

1. 1 調査に使用したテストの概要

実験調査にはArnold Bentleyによって作成された“ Bentley Measurements of Musical Ability ”を使用した。このテストはやや古くまた要素主義的な面を否めないが、今回のように評価基準を定めて縦断的に調査を行う場合に有用であり、客観性、妥当性、所要時間や回答方法、難易度などの面からも適当であると判断した。再検査法によるテストの信頼性は0.84、音楽総合テストとの相関係数による妥当性は0.94、その他ペントリー自身による4種類の実験調査で妥当性が検証されており、⁽⁷⁾日本国内における標準化は1974年に梅本亮夫、古市久子の両氏によって行われている。⁽⁸⁾このテストは実音を用いたヒアリングテストの形式によるもので、あらかじめ録音された指示に従って実際に音を聴きながら一つ一つの問題に答えるようになっており、所要時間は約30分である。以下そのおおまかな内容を検査項目ごとに説明するが、このテストの使用によって音に対する識別力や反応力のようなもの、つまり「音そのものを知覚する力」の測定を企図した。⁽⁹⁾

(1)下位検査項目1：音高識別の問題

440HzのAの音を基準にして上下26Hz～3 Hzの範囲内で2つのピッチが示されるのでそれが同じか違うかを識別し、異なる場合はその上下関係も答える。音源はオシレーターで、2つのピッチは続けて1秒ずつ持続され、各問題は6秒のインターバルをおいて提示される。

(2)下位検査項目2：旋律を記憶する問題

4分音符5つの音からなる2つの旋律を聴きそれが同じか違うかを識別し、異なる場合は何番目の音が異なるのかを答える。音源はパイプオルガンの8フィートと4フィートのフルート・ストップで、速度MM=120で演奏される。この項目も各問題は6秒のインターバルをおいて提示される。

(3)下位検査項目3：和音構成音の数を分析する問題

2～4音からなる和音を聴き、その和音を構成している音の数を答える。音源はパイプオルガンの8フィートの開管式ダイアペーン・ストップで、各和音は3秒間ずつ持続される。この項目も各問題は6秒のインターバルをおいて提示される。

(4)下位検査項目4：リズムを記憶する問題

4拍からなる2種類のリズム・パターンを聴きそれが同じか違うかを識別し、異なる場合は何拍目のリズムが異なるのかを答える。音源はパイプオルガンの8フィートのダイアペーン・ストップと2フィートの第15番ストップで、速度 MM=72で演奏される。この項目も各問題は6秒のインターバルをおいて提示される。

1. 2 前回の実験調査の手続きとその分析結果の概要

前回の実験調査では、中学校1年生を対象にして4月初旬と9月下旬にテストを実施しその結果を一般の生徒と比較することによって活動期間5ヶ月の間にどのくらい音楽的に成長したのか分析を試みた。⁽¹⁰⁾ 被験者の総数は126名、その内ピアノやエレクトーン等のお稽古ごとの経験を有する者を除いた最終的な有効被験者数は、吹奏楽部員57名と一般の生徒57名の計114人。協力を得た実験校は4校で、その内訳は全日本吹奏楽連盟主催のコンクールにおいて県代表として地区大会へ進んだ上級バンドが2校、平均的な成績を収めた中級バンドが1校、そして小編成の部門に参加した初級バンドが1校である。以下その分析結果の要点のみを箇条書にまとめて記しておく。〔グラフ1〕〔グラフ2〕および〔資料1〕のデータも併せて参照されたい。

①下位検査項目1「音高識別」の分析結果の概要

- ・集団全体の成長に有意差が確認された。(P<0.001)
- ・一般の生徒と比較しても成長の差に有意差が確認された。(P<0.01)
- ・下位の生徒の成長が極めて著しい。

②下位検査項目2「メロディー記憶」の分析結果の概要

- ・集団全体の成長に有意差が確認された。(P<0.05)
- ・下位の生徒の成長が著しい。

③下位検査項目3「和音分析」の分析結果の概要

- ・上位、中位、下位のいずれの生徒にも成長がみられない。

④下位検査項目4「リズム記憶」の分析結果の概要

- ・集団全体の成長に有意差が確認された。(P<0.05)
- ・下位の生徒の成長が著しい。

資料 1

『有意差の一覧』（中学校吹奏楽部員と一般の生徒の比較）

- ①中学校吹奏楽部の生徒の4月入学時と、9月下旬の結果を比較。
- ②中学校一般の生徒の4月入学時と、9月下旬の結果を比較。
- ③中学校吹奏楽部の生徒の9月下旬の結果と、中学校一般の生徒の9月下旬の結果を比較。

	①吹奏楽部の生徒 4月と9月を比較	②一般の生徒 4月と9月を比較	③吹奏楽部と一般の 生徒の9月を比較
1. 音高識別の問題	P<0.001	P<0.01	P<0.01
2. メロディー記憶の問題	P<0.05		
3. 和音分析の問題			
4. リズム記憶の問題	P<0.05		
総点	P<0.001		

そして〔資料2〕から分かるとおり、各実験校ごとの分析から合奏練習時に歌ったり吹いたり、あるいは手を叩いたりして教師と生徒の間でやりとりされるメロディーやリズム

の間違ひについての応答活動や、和音に関する基礎的な説明による演奏の裏付けや再確認などの、教師によるフィードバックの行為の効果が確認された。

(メロディー記憶： $P < 0.1$, リズム記憶： $P < 0.05$, 和音分析： $P < 0.01$)

資料 2

『教師によるフィードバックの行為の有無による成長の差異』
(中学校吹奏楽部の場合)

- ①メロディー記憶の項目：中学校において、教師によるメロディー応答活動が頻繁に行われた実験校と、それ以外の実験校の生徒の比較。

	平均	標準偏差
メロディー応答活動が頻繁に行われた実験校	8.45454	1.15708
それ以外の実験校	7.43478	1.82556

自由度 = 55

$t_o = 1.7382$

($P < 0.1$)

- ②リズム記憶の項目：中学校において、教師によるリズム応答活動が頻繁に行われた実験校と、それ以外の実験校の生徒の比較。

	平均	標準偏差
リズム応答活動が頻繁に行われた実験校	8.86363	0.80030
それ以外の実験校	7.54782	2.03146

自由度 = 55

$t_o = 2.0721$

($P < 0.05$)

- ③和音分析の項目：中学校において、和音の構造に関する基礎的な指導が援用されていた実験校と、それ以外の実験校の生徒の比較。

	平均	標準偏差
和音に関する基礎的な指導を援用した実験校	11.9565	3.54754
それ以外の実験校	9.41764	3.39943

自由度 = 55

$t_o = 2.6698$

($P < 0.01$)

1. 3 今回の実験調査の手続き

今回の調査では、新たに高等学校吹奏楽部に所属する生徒を対象にして前回と同一のテストを6月上旬に実施し、そのうち実質活動期間が中学校時代から通算して30ヶ月以上になる生徒を抽出して得た結果と、前回の調査で得ている中学校1年生のデータとを比較することによって学校吹奏楽の平均活動期間を約3年に拡大した場合の音楽的成長について分析を試みた。活動期間の基準を30ヶ月以上に設定したのは、一般的なモデルとして中学校1年生の5月から3年生の10月まで継続して活動しさらに高校吹奏楽部において1ヶ月以上活動した場合を想定して、調査時点での基準活動月数を中学校時代の29ヶ月に高校での1ヶ月を加えて算出したためである。高等学校の実験校は上級バンド、中級バンド、初級バンド各1校ずつの計3校で生徒数は98名、有効被験者数は中学生57名と実質活動期間30ヶ月以上の高校生69名の計126名で、高校生抽出被験者の平均活動期間は39ヶ月(3年3ヶ月)であった。さらに今回は高校生において楽器名を特定することができたため、各検査項目ごとに担当している楽器によって成績に差異が顕れるのかどうかについても分析を試みる事ができた。対象にした被験者は、高校生全体から調査時点で担当している楽器の演奏経験が1年未満の者を除いた86名である。その他、前回と同様に合奏練習時の教師によるフィードバックの行為の有効性についても検証を行っている。

2. 調査結果の分析と考察

2. 1. 1 下位検査項目1「音高識別」の分析

〔資料3〕に示したとおり、中学校1年生の活動期間5ヶ月の場合と同じ危険率0.1%以下の有意差を伴い、なおかつさらに大きく成長している。これは、合奏に必要とされる重要かつ基本的な操作であるチューニングを数多く体験するとともに、個人やパートなどの生徒だけで行われる練習においても、チューナーを用いることによって精度の高いピッチの確認を頻繁に行うことが可能になったおかげであろう。しかし〔グラフ1〕〔グラフ2〕から、上位の第1、第2グループの生徒よりも第3、第4、第5グループの生徒の成長の方が顕著であったことが分かる。また教師によるフィードバックの行為の有効性については、今回の調査では全ての実験校においてチューニングに関して合奏時に教師によるフィードバックが特別に実施されることがなかったため分析を行うことができなかった。反面このことから、学校吹奏楽の活動においては「音高識別の能力」に関して生徒の自己学習効果が有効に作用していることが明らかになった。また担当している楽器別の分析では、当初チューニングの体験が少ない打楽器の生徒とその他の生徒の間に差が生ずることを予測していたが、最終的に楽器による顕著な能力差は確認されなかった。

2. 1. 2 下位検査項目2「メロディー記憶」の分析

〔資料3〕に示したとおり、この項目についても中学校1年生の活動期間5ヶ月の場合よりもさらに低い危険率0.1%以下の有意差を伴って大きく成長している。しかし〔グラフ1〕〔グラフ2〕から、上・中位の第1、第2、第3グループの生徒よりも第4、第5グループの生徒の成長の方が顕著であったことが分かる。また、教師によるフィードバックの行為の有効性については〔資料4〕の①に示したとおり、合奏時にメロディーの間違いについて歌ったり吹いたりして教師と生徒の間でやりとりされる応答活動によって生徒

自身の演奏の再確認が頻繁に行われていたA校の生徒とあまり行われなかったB・C校の生徒を比較すると、前者の方が危険率1%以下の有意差を伴って高得点であることが確認され、この項目に関して教師によるフィードバックの行為の効果が再び確認された。さらに担当している楽器による成績の差異については〔資料5〕の①に示したとおり、旋律を担当する機会が多いFl. Ob. Clの生徒と旋律を演奏する機会が少ない打楽器の生徒を比較した場合に、前者の方が危険率5%以下の有意差を伴って高得点であることが確認され、楽器によってこの項目に関する能力の発達の様相が異なることを示唆している。

2. 1. 3 下位検査項目3「和音分析」の分析

〔資料3〕に示したとおり、中学校1年生の活動期間5ヶ月の場合とは全く異なって、この項目についても危険率0.1%以下の有意差を伴って極めて大きく成長している、しかし〔グラフ1〕〔グラフ2〕から、他の項目とは異なり中・下位の第3、第4、第5グループの生徒も成長しているものの、上位の第1、第2グループの生徒の成長の方が特に著しく、他の項目で見られたような集団全体が高いレベルにまとまろうとする傾向は未だ現れてはいない。このような和音に関する能力は、他の項目の能力に比べて短期間には成長が現れにくいことをテスト作成者自身が報告しており、他の研究者からも逆にこの特性を利用して音楽的に非常に優れた学生とそうでない学生を見分けるのに有効であったことが報告されている。⁽¹¹⁾しかし今回の調査では活動期間が約3年ということで、上位から下位の生徒までそれぞれのレベルに応じて成長を遂げ、中学校1年生の活動期間5ヶ月の結果と比較すると各グループとも確実に成長していることが確認された。また教師によるフィードバックの行為の有効性については、今回の調査では全ての実験校で和音の構造に関して何らかの説明を伴った指導が行われていたため分析を行うことができなかった。さらに担当している楽器による成績の差異については〔資料5〕の②に示したとおり、パート練習および合奏において和音を構成する機会の多いHr. Tb. Fg. Tubaの生徒と和音を構成する機会があまり多くないFl. Ob. Cl. Sax. Tp. Perc.の生徒を比較した場合に、前者の方が危険率5%以下の有意差を伴って高得点であることが確認され、楽器によってこの項目に関する能力の発達の様相が異なることを示唆している。

2. 1. 4 下位検査項目4「リズム記憶」の分析

〔資料3〕に示したとおり、中学校1年生の活動期間5ヶ月の場合よりもさらに低い危険率0.1%以下の有意差を伴って大きく成長している。しかし〔グラフ1〕〔グラフ2〕から、最上位の第1グループの生徒よりも中・下位の第2、第3、第4、第5グループの生徒の成長の方が顕著であったことが分かる。また教師によるフィードバックの行為の有効性については〔資料4〕の②から分かるとおり、合奏時にリズムの間違いについて歌ったり手を叩いたりして教師と生徒の間でやりとりされる応答活動によって生徒自身の演奏の再確認が頻繁に行われていたA校の生徒とあまり行われていなかったB・C校の生徒を比較すると、前者の方が危険率5%以下の有意差を伴って高得点であることが確認され、教師によるフィードバックの行為の効果が再び確認された。さらに担当している楽器別の分析では、当初リズム奏の割合が多い打楽器の生徒とその他の生徒の間に差が生ずることを予測していたが、最終的に楽器による顕著な能力差は確認されなかった。

資料 3

『有意差の一覧』（中学校吹奏楽部員と高等学校吹奏楽部員の比較）

中学校吹奏楽部の生徒の9月下旬の結果と、高等学校吹奏楽部の生徒の結果の比較。

	中学校吹奏楽部の生徒の9月の結果と 高等学校吹奏楽部の生徒の結果を比較
1. 音高識別の問題	$P < 0.001$
2. メロディ記憶の問題	$P < 0.001$
3. 和音分析の問題	$P < 0.001$
4. リズム記憶の問題	$P < 0.001$
総 点	$P < 0.001$

資料 4

『教師によるフィードバックの行為の有無による成長の差異』（高等学校吹奏楽部の場合）

①メロディー記憶の項目：高等学校において、教師によるメロディー応答活動が頻繁に行われた実験校と、それ以外の実験校の生徒の比較。

	平 均	標準偏差
メロディー応答活動が頻繁に行われた実験校	9.45454	0.81057
それ以外の実験校	8.76	1.30476

自由度 = 67

$t_o = 2.68503$

($P < 0.01$)

②リズム記憶の項目：高等学校において、教師によるリズム応答活動が頻繁に行われた実験校と、それ以外の実験校の生徒の比較。

	平 均	標準偏差
リズム応答活動が頻繁に実施された実験校	9.38636	0.71401
それ以外の実験校	8.96	0.95833

自由度 = 67

$t_o = 2.06823$

($P < 0.05$)

資料 5

①メロディー記憶の項目：主旋律を演奏する機会が多い楽器 (Fl. Ob. Cl) と、打楽器の生徒の比較

	平均	標準偏差
主旋律を演奏する機会が多い楽器 (Fl. Ob. Cl)	9.57692	0.63081
打楽器	8.875	1.16592

自由度 = 32

$t_0 = 2.13192$

($P < 0.05$)

②和音分析の項目：和音を演奏する機会が多い楽器 (Hr. Tb. Fg. Tuba) とそれ以外の楽器の生徒の比較

	平均	標準偏差
和音を演奏する機会が多い楽器 (Hr. Tb. Fg. Tuba)	15.4347	2.77920
それ以外の楽器	13.5873	4.04590

自由度 = 84

$t_0 = 1.99896$

($P < 0.05$)

2. 2 考察：高等学校吹奏楽部員の音楽的成長の実態

以上の分析結果を集約して、活動期間を30ヶ月以上に設定した今回の調査で明らかにされた高等学校吹奏楽部の生徒の音楽的成長の実態を、次の4点にまとめておきたい。

第1に、前回の調査とは異なって全ての検査項目において危険率 0.1%以下の有意差を伴った顕著な成長を遂げており、このことから長期間にわたる活動では学校吹奏楽が有する音楽に関する教育的効果や自己学習効果が広範囲に有効であることが確認された。しかし「和音分析の項目」を除いて依然として上位の生徒より中位および下位の生徒の成長の方が著しく、集団全体が高いレベルにまとまろうとする傾向が再び確認された。これについては〔グラフ3〕のパーセントイルグラフからもその兆候を読み取ることができる。

第2に「和音分析の項目」については、他の検査項目とは全く異なり中・下位の生徒も成長しているもの上位の生徒の成長の方が著しく、他の項目で見られたような集団全体が高いレベルにまとまろうとする兆候はまだ現れていない。

第3に、歌ったり吹いたり手を叩いたりして教師と生徒の間でやりとりされるメロディーやリズムの間違ひについての応答活動や基礎的な説明による演奏の裏付けや再確認などの、いわゆる教師のフィードバックの行為の効果が再び確認された。

第4に「メロディー記憶の項目」について、旋律を担当する機会が多い楽器の生徒と旋律を演奏する機会が少ない打楽器の生徒の成績を比較した場合に、前者の方が危険率5%以下の有意差を伴って高得点であることが確認された。同様に「和音分析の項目」についても、和音を構成する機会の多い楽器の生徒とそれ以外の生徒を比較した場合に、前者の方が危険率5%以下の有意差を伴って高得点であることが確認された。これらのことから、それぞれの生徒が担当している楽器によって能力の発達の様相が異なり、楽器によってはある種類の能力の成長が促進される場合もあり得ることが明らかになった。

2. 3 まとめ：学校吹奏楽の音楽教育機能

前回の研究報告と今回の調査の分析結果を総合して、学校吹奏楽の活動と生徒の音楽能力の発達の関係について次の4点にまとめてみたい。

まず第1に、全ての項目において有意差を伴った顕著な成長を遂げたことから、学校吹奏楽が有する音楽に関する教育的効果や自己学習効果が極めて有効であることが確認されたものの、同時に「音高識別」「メロディー記憶」「リズム記憶」の項目においては、上級の生徒と初級の生徒の成長の割合が異なり、上級の生徒の成長よりも初級の生徒の成長の方がかなり顕著であることが確認された。この現象は、学校吹奏楽に入部後初めて本格的に音楽と接した初級の生徒の音楽的成長には大変効果的であったのに対して、既にある程度の音楽能力を身に付けていた上級の生徒の音楽的ニーズには、現状の活動や指導のままでは必ずしも満足に答えきれていないことを示唆している。これを放置したままでは、「吹奏楽では音楽を深く学ぶことはできない。」とか「吹奏楽は芸術ではない。」などといった誤解や偏見を解消していくことは困難であろう。よって今後は、レベルの高い生徒にもきちんと対応した音楽的な内容にも深く踏み込んだ指導、つまり音楽そのものと真正面に向きあった指導を積極的に取り入れていくべきであろう。また、このようなより高い音楽性や芸術性を絶えず志向した指導や活動を地道に継続することによって初めて吹奏楽の分野が芸術音楽の1ジャンルとして認められ、さらに将来、芸術教育を担う重要な一分野として確固たる地位を構築していけるものと考えられる。

第2に、短期間にはその成長が顕れにくい「和音に関する能力」については、学校吹奏楽のように長期間継続して行うことのできる部活動が特に有効であることが確認された。つまり長い時間をかけて繰り返し体験することが要求される「和音に関する能力」の習得は、短いサイクルで多くの事柄を総花的に体験する授業においては困難だということを明らかにしている。事実、短時間でしかも説明の繰り返しだけに終始しがちな授業の中では、どのような方法を試みたとしても“生きた知識”として生徒が確実に身に付けていくことはかなり難しいものと思われる。この「和音に関する能力」のみならず全ての音楽能力は、子ども自身の意志によって活動を長期間継続することができ、さらに教師の専門的な裏付けを伴ったサポートも受けながら生徒自身が実際に演奏に参加するという主体的かつ実体験を伴った活動を繰り返し行うことのできる部活動の場において、真の意味での知識の理解や技術の習得が可能であると考えられる。よって、今後はこのような学校吹奏楽の活動ならではの長所を第三者からも正当に評価されるよう積極的にアピールしていくとともに、我々自身もその長所が十分に活用され得るよう、このような観点からもより一層音楽的な内容に深く踏み込んだ指導を志向すべきであろう。

第3に、歌ったり吹いたり手を叩いたりして教師と生徒の間でやりとりされる応答活動や、音楽に関する基礎的な説明による演奏の裏付けや確認などの、いわゆる教師によるフィードバックの行為の有効性が確認された。つまりこれらの応答活動や説明などは、単にその時に対象としている一部の生徒や特定の楽器を演奏している生徒のみならず、それ以外の全ての生徒も同時にそのやりとりや説明を聞くことによって一緒に考え、取り組むことができるからである。そしてそれらの指導や活動の結果や効果などについて、リアルタイムにしかも身をもって体験し理解することができるものと思われる。音楽の学習場面では、生徒自身が「考え」「実感して」「共通理解にする」という活動が有効であり、その一つ一つを納得いくまで何度も体験できる有意義な場の一つが学校吹奏楽を初めとした部活動である。またこれらをサポートするのが「音楽の構成要素に関する概念や知識」「技術」「興味や関心」であり、そのどれが欠けても先に述べたような活動の長所は損なわれる。例えば、技術の習得にはただやみくもに練習させても効果がなく、どのようになることを要求しているのか、それは何故か、それができるとどうなるのか、そして練習の前後の演奏の違いをきちんと示すことによって次の段階、次の練習への興味や関心へとつながっていく。もしこの概念や知識面での説明という行為を怠れば、何の為に練習しているのか、それによって演奏がどう変わったのか、今の練習はいったい何だったのかというように、生徒は自分たちの活動に不信を抱き、単に先生が怒るから練習するのだという受身的な状態になりかねない。また、逆にある程度の技術が伴わないと生徒自身も納得のいく演奏もできず活動への興味や意欲が湧きにくくなり、教師も満足な説明をすることが困難になるであろう。よって、真の意味での技術の習得のためには音楽の構成要素や基本的な奏法に関する概念や知識の理解が不可欠であり、教師も音楽的現象を適切に分かりやすい言葉へおきかえたり歌や身体動作も援用して説明し、それを生徒に概念化させたり、考えさせたり、感じ取らせたりすることができるような指導技術を身に付けるべきであろう。仮にどんなに厳しい指導が行われても、それが何の為に行われそれによって何ができるようになったのか、そして自分達の演奏がどのように変わったのか、練習の前後の関係やその音楽的な変貌について教師によってきちんと説明がされていれば、生徒もその活動の趣旨を理解し練習に不満を感じることも少なくなるのではないだろうか。我々は「きびしい指導」と「乱暴な指導」を混同してはならない。

第4に、生徒が長期間同一の楽器を担当した場合に、楽器によっては特定の音楽能力の発達が促進されたり、逆に身に付きにくかったりすることが確認された。これを補うには、説明や指導を行う際に全員を対象にしたり、特定の生徒だけでなく問題点を全員に投げかけるなど、教師と集団全体との間でやりとりされるフィードバックが有効であろう。また、3章において取り上げる歌唱活動の導入等、楽器によっては不足してしまう体験を他の活動で適切に補い、音楽をトータルに体験できるようにする配慮も必要である。

3. 提言：学校吹奏楽への期待

前回および今回の調査結果から、学校吹奏楽の活動は生徒の音楽的成長に非常に有意義な場を提供しており、その指導法の如何によってはさらにその効果の増大が期待できることが明らかにされた。そこで最後にこれらを踏まえて、活動内容や指導法等のソフトの面のみならず組織に係わる問題点にまで視野を広げて、提案と要望を3点ほど行いたい。

3. 1 歌唱活動の導入

第1に、学校吹奏楽の音楽教育機能をより高めるために、活動の中に「歌うこと」を積極的に取り入れることを提案したい。最近、旋律に適切なフレージングを行い、それにふさわしい吹き方やブレスの位置を決めるといった基本的なことのできない者が少なくない。彼らは複雑で細かい音符を大きな音で正確に吹くのは得意だが、自分自身で解釈して一つのメロディーを音色やダイナミックス、アゴーギグなどにも注意を払いながら吹くということが苦手である。要するに運指上のテクニックは身に付いていても歌心が伴ってなく、旋律線が美しいメロディックな曲よりも、細かい刻みや掛け合い、変拍子などが現れるリズムミックな曲やテクニカルな曲を好む傾向が強いように思われる。これらを解決する一手段として、歌唱活動を積極的に取り入れることが有効であると考え。歌唱には息継ぎとそれに付随したフレージングやダイナミックス、アゴーギグなどの演奏技法上のみならず、呼吸法やブレスコントロールの面でも管楽器の演奏と共通する部分が多いことはよく知られている。例えば声帯の使い方は、どちらも上級者になるほど歌唱時と管楽器演奏時が同じ状態に近づき、ファイバースコープを用いて撮影すると映像だけではその両者の区別はできなくなる。要するに歌手でも管楽器奏者でも上級者になればなるほど息の使い方が巧くなり、無駄な息づかいが減少してくるのである。このようなメリットを持つ歌唱活動は、実際に一部の有力校も含めた多くの学校において活動に組み入れられており、既にその効果も確認されている。⁽¹²⁾ よって、学校吹奏楽が単に楽器を演奏する場だけではなく、もっとトータルに音楽を学ぶことができるような場であるためにも、また担当する楽器によっては過不足が生じてしまいがちな種類の音楽体験を補うためにも、「歌うこと」を活動の中に積極的に取り入れていくように提案したい。⁽¹³⁾

3. 2 コンクール全国大会の小編成部門新設

第2に、今後の少人数化への対策の一つとして、吹奏楽コンクールの全国大会に参加人数25名程度以下でそれに適した課題曲を設定した小編成の部門の新設を提案したい。今日の生徒数減少に連動した吹奏楽部の少人数化を考慮したとき、大編成で華々しく大曲や難曲を演奏できる学校のみ全国大会まで進む道が確保され、人数やパートを確保できない小編成の学校は良い演奏をしてもなかなか認められず、全国大会を目標にした活動が行いにくいというのであれば、将来生徒の関心が失われ学校吹奏楽が衰退してしまう危険性を否定することができない、一部の大規模校だけを対象にした全国大会ではなく、各校の実状に合わせた曲を少人数で演奏しても独立した部門として別個に審査が行われ、質の高い演奏をすれば全国大会まで進む道が用意されている、つまり小規模校で小編成でしかコンクールに参加できない学校の生徒にも全国大会という大きな目標と夢を持たせることができれば、将来の生徒数減少とそれに伴う吹奏楽部の少人数・小編成化にも多少なりとも対応できるであろう。このように人数や楽器編成上の理由から大編成部門に参加できない学校は今後確実に増えていく。⁽¹⁴⁾ 一部には活動の範たるコンクールでは大編成の模範的演奏を競うべきであるという意見もあるが、これはコンクールというものを非常に狭い視野でしか捉えていない考え方でありとても賛同できない。よって、人数や楽器編成等の物理的な理由による制約を撤廃し、全日本吹奏楽連盟主催のコンクールにも小編成の独自の部門が設定されることを要望したい。

3. 3 チェックリスト方式による審査の導入

第3に、コンクール関連の問題点を正常化する方策の一つとして、審査の採点方法を現在の「審査基準が曖昧なスタイル」から「チェックリスト方式」に変更することを提案したい。前回の研究でも述べたとおり、少なくとも小・中・高等学校のレベルでのコンクールの審査とは、演奏の水準を査定したり達成度を査定するのに有用な総括的評価から形成的評価に改めるべきであり、⁽¹⁵⁾ 現在一般的に用いられている「A・B・C判定+自由記述の講評」という漠然とした方法では、生徒に無用の誤解を生じさせるばかりか指導者自身にとっても演奏のどのような点が劣っており、今後どのような点を補うような指導に改めていけばよいのか非常に分かりにくい。この不明瞭さが、コンクールにおいて音楽外での無意味な競争を扇動してしまう大きな誘因の一つになっている。ここで提案するチェックリスト方式とは、例えば「音程の正確さ」、「音符の正確さ」、「強弱の適切さ」、「リズムの正確さ」、「テンポの正確さ」、「音色の美しさ」、「フレージングや各楽器のバランスの適切さ」、「タテの線やヨコの線の揃い具合」、そして「曲全体を通しての総合的な技術や表現」などの審査項目を予め設定しておき、そのチェック項目が印刷されたリストにしたがって審査員が課題曲、自由曲ごとに「A・B・C判定」をそれぞれの欄に記入していき、最後に総括的な講評やアドバイスを書き加えるという方法である。そして各団体に贈られる賞も、各項目の「A・B・C」の数を機械的に集計して決定される。この方法によれば、審査基準の公平さも保たれ、なおかつ各審査員のジャッジペーパーがそのまま各団体の演奏に対する明確な反省材料になり、今後の活動の目標や活動内容の改善点の指針にもなり、次に取り組むべき具体的な練習課題にもなり得るであろう。⁽¹⁶⁾ ⁽¹⁷⁾ 以上のことから、この問題についても関係者による前向きな検討によって、現在の審査方法が早急に改められ、この「チェックリスト方式」が導入されることを要望したい。

おわりに

学校吹奏楽が教育活動の一環として音楽教育の一端を担うことができ得るのか？教科の枠組の見直しによる音楽科再編成に象徴されるような学校音楽教育そのものに係る大きな変革の流れを目前にして、また社会教育活動との融合が本格的に検討されているこの時期に、まさにその真価が問われようとしている。⁽¹⁸⁾ ⁽¹⁹⁾ このような状況の中、学校吹奏楽が校内唯一の音楽活動であるという一部の高等学校から、芸術としての音楽不在の活動を指向し過ぎるあまり、多くの弊害も生じているという報告が聞かれるのも残念ながら事実である。⁽²⁰⁾ 質的内容が問われる現代社会において、吹奏楽が身内の中だけの偏ったオタク的趣味にとどまることなく音楽的にも独立した1つのジャンルとして適正に評価され、同時に芸術教育の有意義な場としてもその有効性が正しく認識されるためにも、また今後の生徒数減少に伴うバンドの少人数化に対応するためにも、我々は華々しい演奏や活動のみを希求することなく、生徒にとって真に価値あるものを有意義に提供できる場としての学校吹奏楽の在り方を、音楽教育の分野における研究成果やアプローチの方法なども積極的に取り入れ、広い視野で新たな視点から模索し直すべきであろう。⁽²¹⁾ ⁽²²⁾ ⁽²³⁾ よって今後は、吹奏楽を音楽教育や芸術教育の一分野としてどのように位置づけていけばよいのか、さらに研究を進めていきたい。なお最後になったが、繁雑な作業にも係わらず協力をいただいた実験校の指導者と生徒諸君に謝意を表したい。

《注、および参考資料》

- (1) 八木正一「吹奏楽部のあり方をめぐって」、季刊音楽教育研究第68号、音楽の友社、1991
- (2) 前掲書(1)、ならびに安達弘潮「学校吹奏楽活動に思う」、季刊音楽教育研究第69号、音楽の友社、1991
- (3) 中野渡勝弘「器楽教育としての学校吹奏楽再考Ⅰ」、吹奏楽紀要第2号、日本吹奏楽指導者協会、1992
- (4) 有道惇「中学校における部活動の在り方」——吹奏楽を通して——、岡山大学教育学部研究収録第51号、1979
- (5) 新山王政和「バンド活動における音楽教育の可能性」——指導法と音楽能力のかかわり——、日本吹奏楽学会研究紀要第3号、1993
- (6) 新山王政和「中学校吹奏楽部員における音楽能力の発達過程」——ベントリーテストによる実験調査の報告——、愛知教育大学研究報告第43号、1994
- (7) Arnold Bentley「子どもの音楽能力をテストする」、加藤昭二・加藤いつみ共訳、音楽の友社、1969
- (8) 梅本亮夫・古市久子、「Bentley 音楽能力テストの標準化」、「音楽学」第21(2)、1975、日本音楽学会
- (9) 梅本亮夫氏は Bentleyの音楽能力論について次のようにまとめている。
「①音楽の最も初歩的な形態はメロディーの区切りで、それは音的側面を含む音統合から構成される。②メロディーの理解は記憶なくしては不可能である。これはメロディーを構成する音高と音長を理解する能力による。③半音程よりも小さい音の識別力は、声楽の場合、および鍵盤楽器を除く楽器を演奏する場合、良いイントネーションを得るのに必要である。④和音はメロディーにとって基本的なものではないが、演奏者が演奏中に、異音に気がつくのに必要であり、また、自分自身の音に気がつく、より合奏能力が高まる。」、前掲書(8)
- (10) 新山王政和、前掲書(6)
- (11) Rosamund Shuter-Dyson 「音楽能力」Diana Deutsch 編著「音楽の心理学(下)」、pp. 490. 寺西立年、大串健吾、宮崎謙一監訳、音楽の友社、1987
「～前略～ イーストマン音楽学校の学生について調べたところでは、和音分析テストは、優れた学生と非常に優秀な学生とをうまく分けることができた ～後略～」
- (12) 新妻寛(習志野高等学校教諭)「吹奏楽クラブの経営と実践」、日本吹奏楽学会第3回バンドディレクターズクリニック研究講座、1994
- (13) 真弓基教「『歌う』ということ」、ACCORD No. 10、日本吹奏楽学会、1994
- (14) 辻浦牧人「スクールバンドの今後を思うとき」、ACCORD No. 13、日本吹奏楽学会、1994
- (15) 新山王政和、前掲書(5)
- (16) 安達弘潮「アメリカの管楽器教育について」——ミシガン州における吹奏楽コンクールの実態報告を中心にして——、青森県音楽教育学会、1981

- (17) 安達弘潮「音楽教育における吹奏楽活動」、日本吹奏楽学会研究紀要第1号、1991
- (18) 文部省「新しい学力観に立つ教育課程の創造と展開」、1993
- (19) 文部省「新しい学力観に立つ特別活動の授業の工夫」、1995
- (20) 三浦 立「本物の吹奏楽を」 — 高校バンドの運営から —、前掲書(13)
- (21) 吉富功修、岩崎英子「スクールバンドの指導者に関する研究(1)」 — スクールバンドの指導者のリーダーシップとクラブの雰囲気及び成員のモラルとの関連を中心として —、日本吹奏楽学会研究紀要第5号、1995
- (22) 永澤 譲「学校吹奏楽における教育課程の必要性」 — 学校吹奏楽教育と学校教育の領域とかわりについて —、前掲書(21)
- (23) R. Douglas Greer 「音楽学習の設計」 — 授業の成立のために —、石井信生、野波健彦、吉富功修、木村次宏、弘中知世子、藤本和恵共訳、音楽の友社、1990

プロフィール

新山王 政和 (しんざんおう まさかず)

山口県防府市出身。島根大学教育学部特別教科(音楽)教員養成課程卒業、岡山大学大学院教育学研究科(音楽教育専攻)修了。山口県吉敷郡小郡町立小郡中学校教諭、山口芸術短期大学ならびに宇部短期大学講師を努めた後、1992年に愛知教育大学に赴任。現在、愛知教育大学教育学部音楽科助教授。愛知県立大学文学部講師。平成6年度愛知教育大学公開講座講師。愛知教育大学管弦楽団トレーナー。名城大学管弦楽団トレーナー。日本音楽教育学会会員。日本吹奏楽学会会員。その他、オーケストラ、室内楽、独奏などの分野で演奏活動を行っている。また、1987年より市民吹奏楽団の山口プラスソサエティに所属し、そのうち1989年より1992年まで同団のマネージャー及びトレーナーを努めた。

ファゴットを三田平八郎、岩崎隆司の各氏に、音楽教育学を糸賀英憲、国安愛子、有道惇、砂田坦の各氏に師事。

資料 6

『実験データ』

①中学校吹奏楽部の生徒の4月入学時と、9月下旬の結果を比較。

	平均	標準偏差	Median
4月	38.6667	8.62744	38
9月	42.4211	7.42199	44

自由度 = 56
相関係数 : 0.672079

$t_0 = 4.26231$
($P < 0.001$)

②中学校一般の生徒の4月入学時と、9月下旬の結果を比較。

	平均	標準偏差	Median
4月	38.4912	8.38152	38
9月	39.7544	7.05189	40

自由度 = 56
相関係数 : 0.804649

$t_0 = 1.89582$

③中学校吹奏楽部の生徒の9月下旬の結果と、中学校一般の生徒の9月下旬の結果を比較。

	平均	標準偏差	Median
吹奏楽部の生徒	42.4211	7.42199	44
一般の生徒	39.7544	7.05189	40

自由度 = 112

$t_0 = 1.9492$

④中学校吹奏楽部の生徒の9月下旬の結果と、高等学校吹奏楽部の生徒の結果の比較。

	平均	標準偏差	Median
中学校の吹奏楽部の生徒	42.4211	7.42199	44
高等学校の吹奏楽部の生徒	50.5507	5.07776	50

自由度 = 124

$t_0 = 7.21146$

($P < 0.001$)

①中学校吹奏楽部の生徒：1回目（4月）のテスト結果

	音高識別	メロディ記憶	和音分析	リズム記憶
グループ1	17.36	8.72	15.18	9.63
グループ2	15.75	8.16	11.83	8.
グループ3	14.36	7.72	10.18	7.
グループ4	12.83	7.08	7.91	6.91
グループ5	9.45	4.72	7.09	4.63

②中学校吹奏楽部の生徒：2回目（9月下旬）のテスト結果

	音高識別	メロディ記憶	和音分析	リズム記憶
グループ1	17.81	9.	13.45	9.
グループ2	17.5	8.08	10.41	7.91
グループ3	16.18	7.72	11.27	8.09
グループ4	15.91	7.83	9.58	8.
グループ5	13.81	6.45	8.45	6.72

③高等学校吹奏楽部の生徒

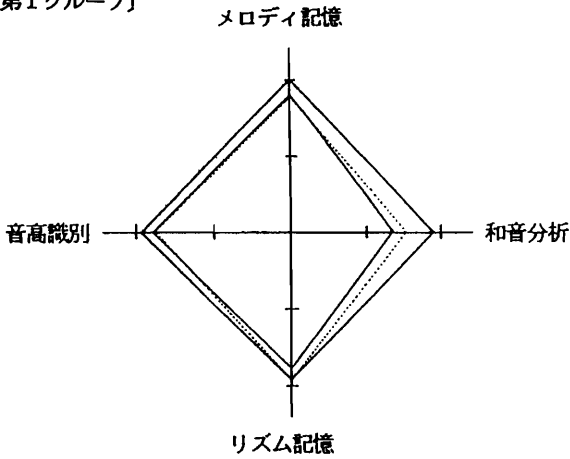
	音高識別	メロディ記憶	和音分析	リズム記憶
グループ1	19.07	9.92	18.78	9.5
グループ2	18.07	9.57	16.5	9.57
グループ3	18.38	9.07	13.69	9.23
グループ4	18.14	9.	11.64	9.21
グループ5	16.85	8.42	9.21	8.85

グラフ1

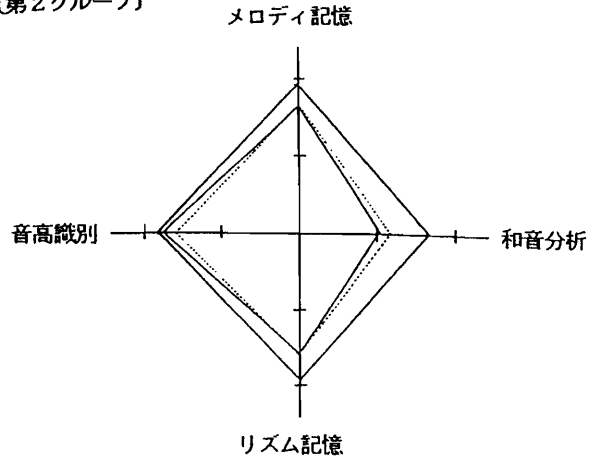
【中学校吹奏楽部員の1、2回目の結果と高等学校吹奏楽部員の結果を比較しています。】

- ・それぞれ成績順に5つのグループに分け、項目ごとに点数の平均を百分率によってグラフ化しています。
- ・波線が中学校吹奏楽部員の1回目、実線が2回目、太線が高等学校吹奏楽部員の結果です。

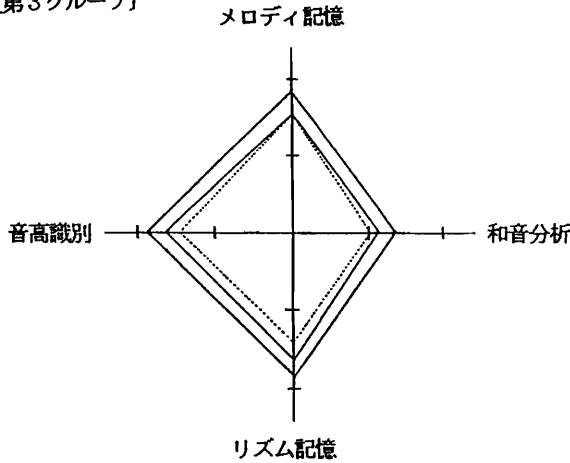
〔第1グループ〕



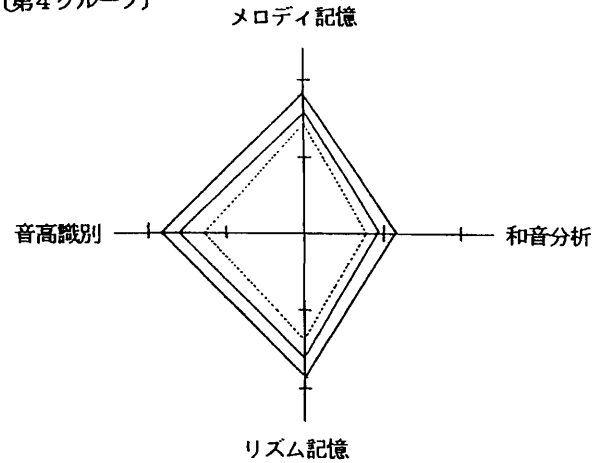
〔第2グループ〕



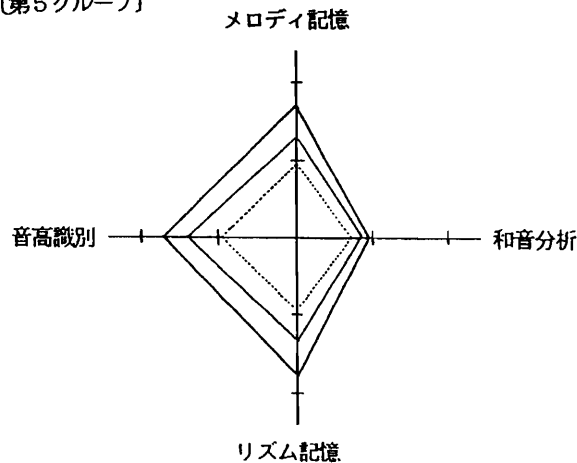
〔第3グループ〕



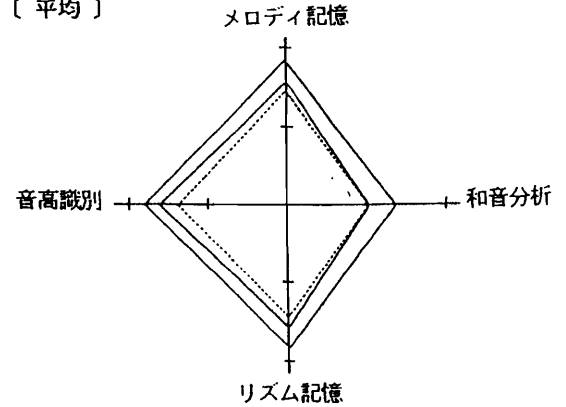
〔第4グループ〕



〔第5グループ〕



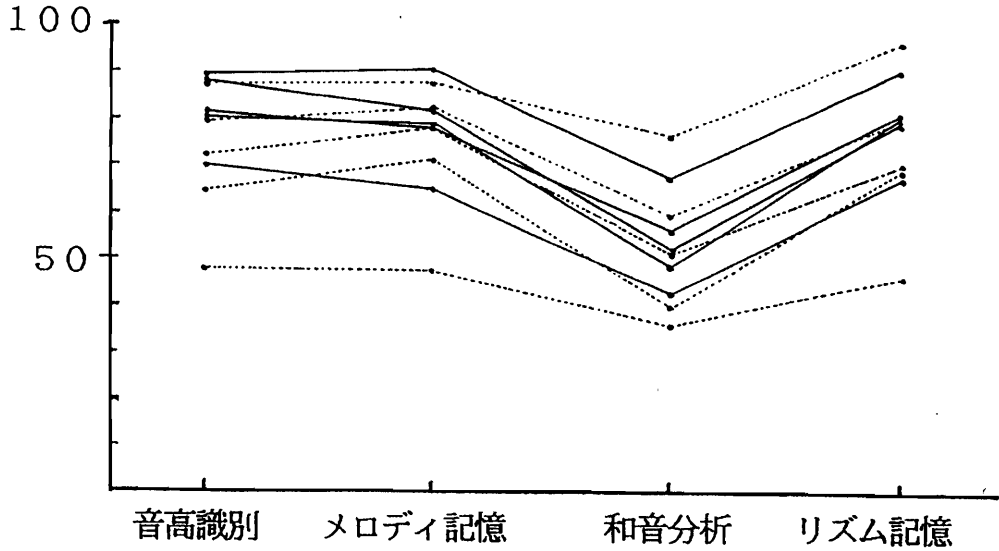
〔平均〕



グラフ 2

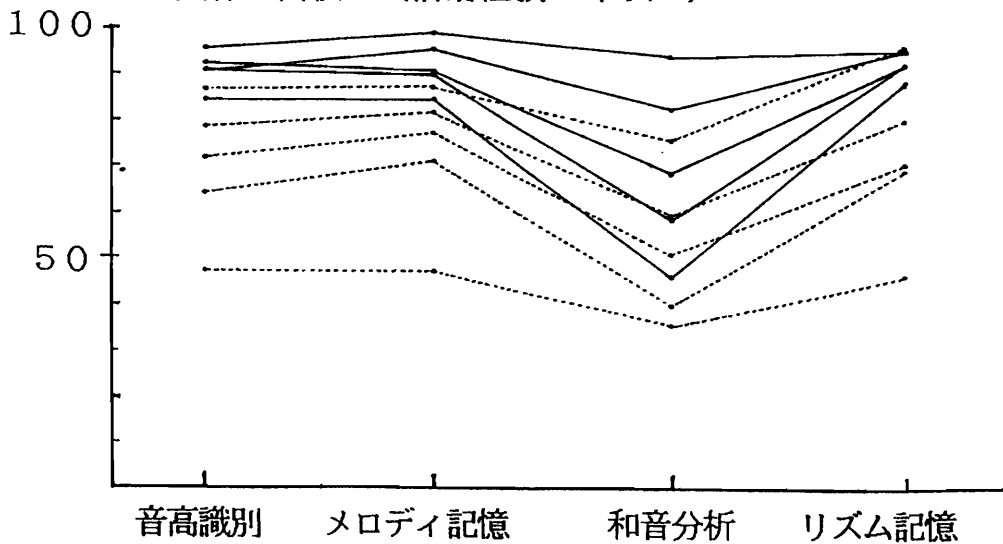
中学校吹奏楽部の生徒

- ・点線が入学時（活動未経験の状態）
- ・実線が5ヶ月後（活動経験5ヶ月の状態）



中学校、高等学校の吹奏楽部の生徒

- ・点線が中学生（未経験者）
- ・実線が高校生（活動経験3年以上）



グラフ 3

《パーセンタイル・グラフ》

- ・中学校吹奏楽部員の1、2回目の結果と高等学校吹奏楽部員の結果を比較しています。
- ・実線が中学校吹奏楽部員の1回目、波線が2回目、太線が高等学校吹奏楽部員の結果です。

